

---

# 南国少年パプワくん アスラクライン

黒也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南国少年パプワくん アスラクライン

### 【Nコード】

N6906I

### 【作者名】

黒也

### 【あらすじ】

アスラクラインと南国少年パプワくんを混ぜました。あくまでも原作と似ていたり似ていない部分もありますがご理解ください。

## ようこそパプワ島に冬流ちゃん

橘高冬流、元GD最強と呼ばれたが彼女は、双子の姉：橘高秋希を  
アスラ・マキイーナ 起動魔神鉄の副埋葬処女を失った。  
ベリアル・ドール

ベリアル・ドール 副埋葬処女は、アスラ・マキイーナ 起動魔神の動力源の核である。

しかし：その代償は、アスラ・マキイーナ 起動魔神の力を使う度に彼女達副埋葬処女は、  
ベリアル・ドール 感情をすり減らし魂が消滅する事だった。

「アキちゃああああああんん！！」

次の日、橘高秋希の葬式が執り行われた。

秋希の名前を呼びながら泣き叫んでいたのは、秋希と冬流の父親の  
橘高マジック：ガンマ団総帥である。

「っ！」

冬流は、涙をこらえて橘高家から出て行った。

「秋希…」

冬流は、亜稀が死んだ砂浜の近くの崖にいた。

「冬流…」

「貴也…」

冬流の後ろには、GDの指令である塔貴也だった。

「秋希が死んだ場所に居たんだ…」

貴也は、悲しい瞳で冬流を見た。

「ごめんなさい…私だけじゃ無く貴也も悲しいのよね…」

冬流は、尻目に溜まった涙を手で拭いた。

「冬流、実は、話があるんだ!」

貴也は、真剣な目で冬流を見た。

「実は…」

数日後

ウィイイイン

ガンマ団本部の中で緊急警報装置が鳴り響いた。

「どうしたんだ!？」

警備室に居たガンマ団隊員が鳴り響いた原因を仲間に聞いた。

「大変です!冬流様が秘石を持って逃走しました!」

「何だと!？」

モニターを見るとガンマ団本部の廊下を冬流が秘石を盗んで逃走していた。

「!？」

目の前に壁があり行き止まりに成った。

カチャ!

冬流は、肩に背負っている愛刀『冬櫻』を構えた。

「冬櫻拔刀!」

ズパッ!

壁がまるでバターを切る様に切断され海が見えた。

ヒュッ!

冬流は、真下の海に落下した。  
スタッ!

真下には、計画をしていたのかボートがあった。

ブウウウウ！

冬流は、無事ボートに着地するとボートを使い逃走した。

「ふふふ…上手くいったわ。この石を使えば、秋希を生き返す事も出来るのね！」

実は、数日前に貴也から秘石の力と点火装置イグナイターと呼ばれるアイテムがあれば秋希を蘇らせる事を教え、そして秋希と冬流の弟の小太郎がガンマ団の最深部に隔離されていた。

「後は、ガンマ団から何とか逃げるだけね。（待っていて秋希生き返らせてあげるから。小太郎必ず連れ戻すから。）」

バツバツバツバツバツ！！

「？」

冬流は、空を見るとガンマ団のヘリが追いかけて来た。

ダッダッダッダッダッ！！

ドカーン！

ボートは、爆発してその衝撃で冬流も海に秘石と冬櫻と共に落ちた。

（私…死ぬのかな？…）

冬流は、海中の中で気絶した。

ザザザ…

ある島の浜辺に冬流は、流れ着いて倒れていた。

スタツスタツスタツ！

浜辺に何かがやって来た。

倒れている冬流のバッグに手を伸ばし拾い上げた。

拾い上げたのは、小学校2年生位の少年で隣に犬がいた。

「えーさ、餌！えーさ、餌！」

少年は、ルンルン歩きで踊り犬も一緒に踊った。

「チャッピー餌！」

「わう！ カプ！」

チャッピーと言う犬が冬流の頭を噛んだ。

パチン！

冬流の目が開き次の瞬間…

「うわああああ！！」

チャッピーの噛んだ痛みで目を覚ました。

「此処は！？バッグは！？バッグは！？」

冬流は、周りを見て探してもバッグが無かった。

「ん！？」

後ろを見ると少年がバッグを持っていた。

「君：お願いだからそのバッグをよこして！！」

冬流は、少年に頼んだ。

ドン！

少年は、素早く冬流の頭に踵落としをした。

「誰が君だ！パプワと言うれっきとした名前があるわい！」

踵落としされて頭を抑える冬流にパプワが答えた。

「いた：仕方ない。こうなったら！」

冬流は、肩に背負っている冬櫻を構えた。

「冬櫻拔刀！」

冬流は、パプワに向かって冬櫻を抜いた。

「キャッチ！」



ガシッ！

「！！」

冬流は、パプワが自分の技をたった二本の指で真剣白刃取りをした事に啞然とした。

ヒョイ！

パプワは、二本の指で掴んだ冬櫻を冬流から奪い何処からか2Bの鉛筆を取り出した。

しゃか、しゃか、しゃか、しゃか、しゃか

パプワは、冬櫻を使い鉛筆を削った。

「ふふふ今時の若いモンは、鉛筆も削れまい。」

「シャーペンがあるわよッ！」

冬流は、パプワに突っ込んだ。

「冬櫻を奪われたなら拳で！」

冬流は、パプワに拳を放ったが…

グオン！

冬流の拳にパプワが持っていた非常に固い椰子の実が当たった。

パカ

冬流の拳で椰子の実は、割れた。

「ツ~~~~~！」

冬流は、涙目になり痛みをこらえた。

「うゝん 中の汁がトロピカル トロピカル」

チャッピーとパプワは、冬流が割った椰子の実のジュースを味わった。

「ね…ねえ…僕…お願いだからバッグ返してもらえないかな？」

冬流は、椰子の実で青あざに成った右手をパプワに向けた。

「ホレ！」

「あつ！ありがとう！」

冬流は、バッグの中を見ると秘石が無くなっていた。

「えっ！石が無いッ！」

冬流は、このバッグの中に確かに秘石を入れた自覚があつた。

「チャッピーその首輪ステキ」

チャッピーは、何時の間にか秘石の付いた首輪をしていた。

「そ・れ・よ！それ！」

冬流は、チャッピーの首根っこを掴んだ。

カプ

チャッピーは、冬流の左手を強く噛んだ。

「イッターーッ！！」島中に冬流の叫び声が響く。

「まったく礼儀を知らん奴だな。」

「た…頼むからその石を返して！何でもするから！」

「そうか…じゃあ体で払ってもらおう。」

「え？」

冬流は、パプワの言っている意味がわからなかった。

「その前に服だけ着替えて良いかしら？」

「ああ良いぞ。」

パプワが言うと冬流は、高校の制服のままでは南国の島で汗塗れになると考え木々が生えた草原に隠れて着替えた。

「出来たわよ。」

冬流は、バッグの中から着替えの服を取り出した。

上が黒いタンクトップで下がジーパンに靴が制服の時に履いていた長いブーツだった。

岩と岩が囲まれて火が付いている上に巨大な貝を置き水を入れて湯を沸かした。

「しっかり沸かせよ。」

パプワとチャツピーは、貝に入った湯の中に入った。

「はい…ふーっ！ふーっ！（体で払えって、こうゆう事だったのね…）」

冬流は、竹の筒で火の辺りを吹いて湯の温度を上げた。

シュツ！シュツ！

しかし、こう言う原始的なお風呂の仕方がわからない冬流は、貝の下にある火を消してしまった。

ばしゃーん！

「ええいぬるい！こんなぬるい風呂に入れるかー！ー！！」

パプワとチャツピーは、巨大な貝を卓袱台返しをした。

「風呂の温度は、41度！！そんな事もわからんのかあああ！」

カプ

「あああ！！すみません！！すみません！！」

冬流は、頭をチャッピーに噛まれてパプワに謝った。

「もう一度ちゃんと沸かせよ！」

「は、はいー！」

湯が沸くまで遊びに出掛けたチャッピーとパプワに冬流が土下座をした。

「しくしくー！」

冬流は、泣きながら湯のやり直しをした。

ガサツ！

草むらに何かが居る事に冬流は、気付いた。

「誰！？」

「ふふふ…だいぶお困りのようね。」

草むらから女性の声が聞こえた。

「人間！？良かった！この島にも人間が…」

草むらを退かすと大きなカタツムリが喋っていた。

「うわああああ！妖怪ーッ！」

「失礼ね……」

逃げ去る冬流に呆れるカタツムリ。

「うわああああ！」

冬流は、遊んでいるパプワの元に走って来た。

「どーした風呂は沸いたのか？」

「か…カタツムリが…カタツムリが…喋っているの…！」

冬流がパプワに懸命に説明していると冬流の後ろの物に気が付いた。

「やあイトウくん。」

「はい。パプワくん。」

パプワとチャッピーは、イトウくんに挨拶してイトウくんもパプワとチャッピーに挨拶をした。

「し…知り合いなの？」

「大の仲良しだ！」

「しゃ…喋っていたわよ！」

「この島の生き物はみんな喋るぞ！」

PAPWAが言うと周りから馬やコアラ、ハエも人間の言葉を喋っていた。

「何なの！？この島ーッ！！」

「うるさい女だな。」

しばらくしてPAPWAは、冬流を自分の家に案内した。

「おい！召し使い夕飯は、まだか！」

PAPWAは、イトウくんも食事に誘っていた。

（召し使い…）

冬流は、泣きながら夕飯を作る。

「ねえPAPWAくん？彼女なんて名前？」

「おい、お前なんて名前だ？」

「冬流。」

冬流は、PAPWA達に教えた。

「フユルだと！」

「やーねトウリュウよー！」

「冬流<sup>とある</sup>よッッ！！それよりも頼むからあの石を返してッ！私は、急いで日本に帰らなきゃいけないの！！」

「帰る？どーやって帰るんだ？」

パプワは、質問した。

「えっ…？船か飛行機で…」

「ヒコオキ？ヒコーキってなんだ？」

冬流は、不安の冬風が吹いた。

「こっつ言つの何だけど。」

冬流は、バッグから筆記用具とノートの紙を使い飛行機の絵を書いた。

「あーそれね。」

パプワは、冬流を島の中央にある山に連れて行った。

「此処で待つてると来るぞ！」

「え…本当に！（やった！これで日本に帰れる！！）」

冬流は、ウキウキしながら待つていると空から翼が羽ばたく音が聞こえた。

「って何なのよッッ！！」



空から巨大な鶏が空を飛んでいた。

ガシッ！

「えっ？キヤアアア！」

巨大な鶏は、パプワと冬流を足で掴むと空に飛んで行った。

「もしかして…これもアンタのお友達なの？」

「その通り。」

巨大な鶏の背中に乗って冬流とパプワは、会話した。

「後どのくらいお友達いるの？」

「たくさん。」

冬流は、こんな常識外れな生き物が喋っている所を想像したくなかった。

「あ！そおそお、言い忘れたが。今日からお前も友達だ！人間じゃあ始めての友達だからありがたく思えよ！仲良なくやろーな！」

こうして私…橘高冬流と南国の少年パプワと愉快的仲間達の生活が始まった。

ようこそパプワ島に冬流ちゃん（後書き）

次回は、冬流がパプワ島の1日を書きます。

働け冬流ちゃん！（前書き）

アスラクライン関係の言葉が出て来ます。

働け冬流ちゃん！

南海に浮かぶ絶海の孤島…パプワ島

そんな朝からの日常を説明しよう。

パプワくんの家では、外でパプワくとチャッピーが朝の体操をしている。

「おいっちにッ！さんしッ！にイにイツ！さんしッ！」

するとパプワくとチャッピーは、槍を持って躍り出した。

「んばば！んばんば！めらっさめらっさ！」

一緒に踊っていたパプワくんだがチャッピーを丸太に縛りながら持って踊った。

「はっはっはっはっ！今日も高知室戸市名物シットロト踊り北欧風は、絶好調だねチャッピー。」

「わう。」

「にしてもトオルは、まだ起きんのか！起こさねば！！」

パプワくとチャッピーは、冬流の寝ているパプワくんの家に向かった。

パプワくんの家では、夢の中に冬流がいた。

「すーっ…ムニヤ…ん……こたろオ……あきちゃん……」

冬流は、夢の中で秋希と小太郎の夢を見ていた。

（お姉ちゃん…）

（冬流…）

夢の中の秋希と小太郎は、遠くから冬流に手を振っていた。

「秋希ちゃん！小太郎！私日本に帰って来たわよ！この石さえあれば私達幸せに暮らせるわ！」

冬流は、秘石を持って秋希と小太郎の元に行った。

（お姉ちゃん！）

（冬流！）

小太郎と秋希は、何時の間にか冬流の懷にいた。

「小太郎！秋希ちゃん！」

シュッ！

ブワゴッ！

二人は、冬流を力一杯蹴った。

「ん…！」

目の前には、 PAPU さんとチャッピーが棍棒で冬流の顔を殴ろうとした。

「わあああ！」

冬流は、咄嗟に PAPU さんとチャッピーの棍棒を避けた。

「何時まで寝ているんだ。起きろ。」

PAPU さんは、冬流に棍棒で当てられなくて悔しがった。

「ゆ…夢？」

「さっさと支度をしろ！朝食を取りに行くぞ！！」

冬流は、現実じゃない事にガッカリしながら支度を始めた。

出掛ける前に PAPU さんは、冬流に大きい籠を持たせた。

「こんな大きい籠を持って何を取るの？」

「いいからついて来い。」

PAPU さんとチャッピーに連れられて向かう籠を背に乗せた冬流。

着くと目の前には、高い岩山がそびえ立っていた。

「さー登るぞ！」

「う・うそ…」

冬流は、悪夢だと現実を受け止めて岩山に登った。

「な…なんで私がこんな事を……」

冬流は、岩山の窪んだ場所を見つけて懸命に登りだした。

「ちゃんと二本の足で歩かんか！」

パプワくんは、岩山を足二本で登っていた。

「妖怪かアンタはツツ!!」

冬流は、岩山を足二本で歩くパプワくんに驚いた。

そしてようやく岩山の頂上に到着した。

側を見ると巨大な卵があった。

パプワくんは、巨大な卵を籠に乗せると冬流に背負わせた。

「じゃ帰ろオカ！」

「結局私が持つのね……ん！」

冬流は、諦めて岩山を降りようとするとうとすると巨大の巨大な鶏が冬流達を追いつけて来た。

「キヤアアア！！」

冬流は、死ぬ気で岩山をパプワくんと同じように走った。

「やれば出来るじゃないか！」

「アホが！！えっ！ひいーーーー！！」

冬流は、冬櫻を持っていた事を忘れながら巨大な鶏から逃げきれた。

「此処まで来ればだいじょうぶ」

パプワくとチャッピーは、卵を茹で始めたがまだ冬流は、息が苦しくて動けなかった。

「おりより お料理」

卵は、茹で上がりパプワくとチャッピーが食べ始めた。

「食べるのか？」

パプワくんは、まだ息が苦しくて食べられない冬流に聞いた。

「食欲がないわ……」

「どれどれ胃の具合を見てやろオ！」

パプワくんは、何時の間にか斧を取り出しチャッピーも手術の衣装を着て両手にメスを持っていた。



「いいえ！ただかせていただきますうつツツ！！」

冬流は、恐くなり苦しくても卵を食べ始めた。

しばらくして卵は、すっかりパプワくんやチャッピーに冬流が食べて殻だけに成った。

みんな卵を食べ終わり一時の休憩タイムを取っていた。

しかし冬流は、卵を取って汗を掻いていた。

「ねえパプワ。」

「なんだ？」

「近くに温泉とかある？」

冬流は、汗を流したかった。

「あるぞ。行くか？」

「ええ。」

パプワくんは、冬流を温泉に連れて行った。

森の中に温泉がありパプワくんは、腰パンツを脱いで温泉に入った。

冬流もパプワくんが子供と言う事もありその場でタンクトップとズボンを脱いで髪も後ろにまとめて温泉に入った。

「ふーっ 極楽、極楽」

冬流は、温泉で汗を流して気持ちよかった。

パプワくんが冬流の顔を見た。

「なんだそのひたいに書かれている物は？」

パプワくんが冬流の額に書かれている『EX-106』と書かれた物に興味を持った。

「これは…罪人の証よ…大切な家族を失った…」

パプワくんは、冬流にこれ以上聞かなかった。

しばらくして汗を流し着替え終わった冬流を見たパプワくんは、空を見た。

「そろそろ…昼食を穫りに行くか！」

「ってさっき食べたばかりじゃない！」

「お天道様が真上だから昼メシの時間だ！行くゾー！」

「わ~~~~~！」

パプワくんは、冬流を縄で縛ると引っ張りながら昼食を穫りに行った。

そんな姿を木の影から人影が隠れていた。

「ふ…落ちたもんだな…冬流。秘石を持ってガンマ団から逃げ出すとはバカな女よ。」

人影は、男で髪が長く冬流よりも年上であった。

腕には、『マジック』と英語で書かれた名札を付けていた。

「おめは、このミヤギが倒してやつかんす。」

続く…

働け冬流ちゃん！（後書き）

次回は、東北兄ちゃんミヤギが出て来ます。

## 東北少年ミヤギくん登場

前回から冬流を監視している東北ミヤギが動き出す。

「ふ．．．原始的な島だべ。」

ガサッ

草むらからサーベルタイガーが現れた。

「ガオツー!!」

サーベルタイガーは、ミヤギに襲い掛かった。

シュッ!

ミヤギは、背中に背負っている物を抜いた。

サーベルタイガーの胸の辺りに「猫」と書かれた文字が現れる。

「ニャオ~~~~ン?」

サーベルタイガーは、文字の「猫」に何故が変わってしまった。

ドン!

ミヤギは、蹴り上げるとサーベルタイガーが逃げて行く。

「くく．．．覚悟しとけヨ冬流!おめは、この東北ミヤギが倒してやっかんナ。」

ミヤギは、不敵に笑う。

「しっかり洗えヨ。」

「うう・・・」

パフワくんの家では、冬流がこき使われていた。

「アンタ腰ミノしか付けていないのに何でこんなに沢山あるの？」

「ふふん甘いナ！僕は、おしゃれさんだから１日に七回パンツを履き替えてるのサ。」

「誰も見ないわよそんなモノ。」

ガブツ！

「ギャアアアア！」

冬流の頭をチャッピーが噛む。

「おまえは、まだ自分の立場が解つとらんナ。」

「アアッ！ごめんなさいご主人様ーッ！！」

等と言い冬流は、パフワくとチャッピーにいじられていた。

「あ・・・あれが冬流！？（信じらんねエ！GDとガンマ団No.1のアノ人斬り橘高があんなガキにパシられてるとは・・・）」

ミヤギは、啞然と見ている。

「フハハハ・・・！勝てる・・・勝てッぞ！！冬流！おめを倒してオラがナンバーワンになるッッ！！！」

自信満々にミヤギは、大声を出す。

「何がよー！」

べし！

冬流は、ミヤギの背後から冬櫻を使って彼の頭を殴りつける。

「い、いつの間にッッ！！」

「あれだけ大声出せば気付くわよ。」

冬流は、ミヤギの事を馬鹿と思っていた。

「アンタ、ガンマ団の刺客なの？」

「ふっふっふっその通りだべ。」

頭から血を滝のように出しているミヤギ。

「裏切り者冬流。おめを連れ戻して秘石も貰うぞ!」

「つまりパフワ島の一員になりたいゆうーことだな?」

「ちがーう。」

ミヤギは、パフワの答えに否定。

「悪い事は、言わないわ・・・この島から出て行きなさい!」

ミヤギは、冬流の予想もつかない答えに驚く。

「ふざけてねエ!勝負を捨てて逃げッ気か!」

ミヤギは、冬流に対して抗議する。

「早くしないと私の様な目に合うわよ・・・」

ガブツガブツ!

冬流は、涙を流しながらチャッピーに噛まれている。

「と、とにかく秘石を取り戻さん事には、帰るわけにいかねエ!」

ジャキン!

ミヤギは、ポケットから銃を取り出した。



「死ねエエエ!!」

ミヤギは、銃を冬流に向ける。

シュツ!バコ!

冬流は、素早くミヤギの懐に入り拳で下腹を殴る。

「何度も言わせないでよ・・・早く島から出なさい!」

冬流の瞳孔が開く。

「うつ・・・」

ミヤギは、口から血を流して下腹に手を当てる。

「ゆ・・・許さね!!許さねゾ!オメエ等!この東北ミヤギを馬鹿にしやがったなあ!!」

ミヤギは、背中にしよっている物を抜く。

「何大声で田舎自慢しとんだ?」

「名前だベーツ!」

ミヤギは、パフワに突っ込む。

「オメエ等皆殺しにしてやツかな。」

ミヤギが抜いた物は、竹刀と同じ大きさの筆の剣だった。

「「「・・・」」」

冬流達は、ミヤギの武器に不思議がる。

「アンタ今の自分の姿に疑問はないの？」

「うるさいッッ！聞いて驚くでねエ！これは、中国三千年の歴史の武器！「生き字引の筆」だあああ！」

「姿だけでなく名前までハズかしい武器だナ。」

「ほっというッッ！！」

ミヤギは、パフワにバカにされて悔しがる。

「何なの？それで書道でもするの？」

「ふふふ・・・その通りだべ。こーゆー風になッッ！！」

シュッ！

冬流のシャツには、「蛙」と書かれていた。

「げ・・・ゲロ・・・ゲロゲロゲーロ。」

冬流の体が緑色に成り蛙の様な動きをしながら何処かに向かって行った。

「はーっはっはっ！この筆は、相手を書いた文字の物に変えてしまふんだべ！」

「じゃあ、この南米産のベルツノガエルをイリオモテテナガコガネに変えてどーすつべー!!」

ミヤギは、またパフワに突っ込む。

「小僧、次はお前の番だべ!」

ミヤギは、パフワに生き字引の筆を振る。

ぴよい!

ぱっ!

ぺいッ!

しかしパフワは、軽々と避けて行く。

「くそ~~~~ッ! ちょこまかちょこまか逃げおつてえ~~~~  
!」

ミヤギは、息が上がっていた。

「行け! チャッピー!」

がる!

チャッピーは、生き字引の筆を持つミヤギの腕を噛んだ。

「だアーーッ!」

ミヤギは、手から血を流して痛がる。

「えらいぞチャッピー！」

ミヤギの腕から離れた生き字引の筆を持ってパフワがチャッピーを  
誉める。

「さーて今度は、僕の番だぞ。」

ミヤギは、窮地に追い込まれる。

シュッ！

ミヤギの上着に「サル」と書く。

「く……くくく！」

「？」

パフワは、何かおかしい事に気付く。

「馬鹿たれ！その筆は、漢字で書がねと効果ないべー！」

パフワくんは、漢字が書けない。

無論チャッピーは、字が書けない。

「さあ！返して貰うぞッッ！！はあッッ！！」

ミヤギは、生き字引の筆を奪おつと駆け寄る。

ガシッ！

ミヤギの腕に誰かの手が止めた。

「冬流！！」

冬流は、びしょ濡れの姿でいた。

「蛙になつて池に飛び込んだお陰で文字が消えたわ。」

そつ生き字引の筆は、あくまで筆なので水に浸けると消えてしまい欠陥があつた。

「いやア・・・すっかりお世話に成っちゃったわね。カモ～～ン。ミヤギちゃん～～ん？」

冬流の顔は、笑顔だが目が笑っていない。

翌日

「さー今日も食料を探しに行くゾー！」

「ええ」

何時もの日常に成っていた。

「つとその前に！」

みんな別の場所に移動した。

「ミヤギくんに水をあげなきゃね！」

「大きく育ちなさい。」

ミヤギは、先日冬流達にボコボコにやられて「植物」と書かされポーズがグリコのイメージ絵の様に成っていた。

東北少年ミヤギくん登場（後書き）

次回は、忍者トットリくん参上！！

忍者トットリ参上！

南海に浮かぶ絶海の孤島パフワ島。

今日も何時も通りパフワちゃんとチャッピーは、遊んでいる。

「あちよーっ！あちよっ！はちよっ！」

パシ！

ピシ！

パフワくんの飛び蹴りをチャッピーは、左右の手で見事に防ぐ。

「北海道釧路名物タンチョーヅル！」

プス！

パフワくんは、何処からかタンチョーヅルを出してタンチョーヅルがチャッピーの頭を強く突いた。

「くうーん！くうーん！」

チャッピーは、痛がっている。

「ごめんごめんチャッピー！ウイットにとんだアメリカンジョークのつもりだったんだヨ！」

パフワくんは、チャッピーの介抱をする。



「ぐっもおにんパフワくん。」

「おお！イトウ君！」

パフワくんは、イトウ君がやって来た事に気付く。

「今朝も韓国伝統武術テコンドーが絶好調ね。」

「はっはっはっ！後ろ回し蹴りがポイントさ！」

パフワくんは、イトウ君にテコンドーの基本を言う。

「ところで冬流ちゃん居る？」

「アイツなら家のそーじしてるゾ！」

「ありがとうパフワくん。」

イトウ君は、そのままパフワくんの家に向かう。

パフワくんの家の中では、掃除を懸命にする冬流が居た。

まあ当然だとは思いますがサボったらまたチャッピーに噛まれるからでもある為従っている。

（待っていてねコタロー！秘石を取り戻したらお姉ちゃん必ず日本に帰るからね！！）

「それにしても・・・」

冬流は、ポケットからコタローの写真を見る。

「本当に可愛い弟？」

冬流は、頬を赤くしながらコタローの写真を見る。

「本当に可愛い弟さ・ん・ね？」

後ろからイトウ君が眼球の血管を見える位真っ赤にしながら興奮した口調で冬流の後ろにいる。

「いきなり近づかないでよ！それとコタローの写真を見て淫らしく興奮するな雌雄団体！」

冬流は、冬櫻の峰打ちの辺りでイトウ君を半殺しにした。

「おい！そーじは終わったか？」

パフワくん達が家の中に入って来た。

「ん・・・ええ全部済んだわよ！」

するとパフワくとチャッピーは、家の壁を触った。

「まだホコリがついている・・・」

パフワくとチャッピーは、湯のみにお茶を入れると不機嫌に言う。

「小姑ですかぁ！オノレはッ！！」

「もう一回やりなおしね。」

パフワくん達は、外に出た。

「うう・・・」

渋々冬流は、掃除を再開し始めた。

キラッ！

「ん！？」

冬流は、窓を掃除していると空が光る。

次の瞬間！

ギュルルル！

空から無数の手裏剣を冬流目掛けて来た。

「うわぁ！」

冬流は、ギリギリ避けた。

「はあっ！ガンマ団！？」

冬流は、外に急いで出た。

「おい！こないだのミヤギといいガンマ団ってなんだ？」

パフワくんは、冬流に質問した。

「世界最強の殺し屋軍団よ！私の命と秘石を狙っているね……  
・？」

冬流は、振り向くと大きな草の塊があつたが無視して話し続ける。

「一体何処に隠れているのよッ！……？」

ピタッ！

草の塊は、冬流に見られながら止まる。

冬流は、草の塊に近付くと忍者のコスプレをした青年がバレバレの草の塊に隠れていた。

「誰よアンタ！」

「あ！さすが冬流！よー見破ったがな！！」

「ふざけてるの？」

青年は、冬流の質問を無視しながら話し続ける。

「ガンマ団第二の刺客！忍者トットリただ今参上！！」

トットリは、自分でカッコいいと思ったポーズを決める。

「あれが世界最強の殺し屋軍団か？」

「ちょっと自信・・・無いわ！」

「そいだ！ミヤギ君はどげしたッ！？」

「ん？ミヤギ？奴ならあそこで光合成しとるゾ！」

パフワくんは、前回冬流に半殺しされたミヤギをトットリに見せた。

「おおゝ！ああミヤギ君ッ！！こげに青々としてッッ！！」

「秋だから実でもつけるだろオ。」

「ゆ・・・許さんどオ！よオも僕のベストフレンドミヤギ君をオオ！！」

トットリは、目から殺意を満たしてパフワくん達に睨んだ。

「くらってみいーッ！トットリ忍法水竜巻ッッ！」

大量の水が冬流を襲おうとした・・・・・・が？

「じらー！」

冬流の目の前には、ホースを使って水を出している姿しか無かった。

「アンタ忍者でしょ！？地面割ったり水柱ぐらい立たせんかッッ！」

「誰がそげなモン絵に書くだや……」

冬流の突っ込みにトットリは、言い返せなかった。

「そいなら火炎の術はどげだッッ！」

トットリは、馬鹿デカイマッチを持って火を着けた。

バシャッ！

パフワくんは、さっきトットリが使っていたホースを使ってトットリ目掛けて水を出した。

「ひ……卑怯だゾ！人の武器を使うやなんて！」

「そんなモン武器にするなッ！」

パフワくんは、アホなトットリに突っ込む。

「アタシもナメられたモンね……こんなアホをよこされるとは……やられたく無かったら帰りなさいッッ！」

「ちいとおちやめな一面のぞかしたけんでそげに気に入らんだっつかあ……ほいだったら本気をだしてやっわア！いでよ！脳天気雲ッ！！」

するとパフワくん達の真上に変な雲が現れた。

「な・・・なに？この雲は！？」

「ふっふっふっこいがトットリ忍法奥義！天変地異ゲタ占いの術ッ  
ッ！」

トットリは、自分の履いているゲタを飛ばした。  
ズバァッ！

トットリは、下駄を飛ばすとカミナリと書かれた文字が見えた。

ドッカァァァンンン！！

脳天気雲から凄まじい雷がパプワ達に落ちた。

三人は、体が真っ黒焦げに成りチャッピーと冬流は、動けないがパ  
プワくんはと言うと・・・

「わーい！カミナリカミナリ。」

予想も出来ない事に平気だった。

「説明すつぞ！この術は下駄が表しちよー天氣を脳天気雲に実行さ  
せる技だわやッ！」

「よーするにゝあーした天氣になーれ！ゝなろうオが。」

「そげに言われたらミもフタもあらせんわナ。」

考えればその通りだったりする。

「氣イを取り直して次のお天気いってみっどーッ!!」

トットリは、再び下駄を飛ばす。

ポテ!

今度は、ヒヨウと掛かっている。

ヒヨオオ!

「うわあああッ!!!!」

脳天気雲から巨大な雹が大量に降って来て逃げるパプワくん達。

「ははは!逃げれ!逃げれ!裏切り者<sup>モン</sup>がアッ!!」

トットリは、愉快そうに言う。

「ちいいッ!!池に飛び込むわよッ!!」

冬流は、池に飛び込もうとすると・・・

「はい パプワくんお元気い」

巨大な網タイツを足に付けた鯛が現れた。

ごん!

鯛のタンノくんは、巨大な雹に当たり池の上で浮いて気絶していた。



「な・・・なんだあかあの魚は・・・!？」

トットリは、タンノに氣をとられていた。

「隙ありッ！冬櫻抜刀！」

「!」

ポイツ！

トットリは、下駄を軽く飛ばすと台風と書かれた文字がある。

ビュウウウウ！

「!ー!ちいいッ!ー!」

冬流は、体制を直そうとすると真下にはイトウくんが居る。

「冬流ちゃあん？私の胸に飛び込んできてッ!ー!」

何故か興奮気味のイトウくん。

イトウくんの所に当たりそうに成る寸前で行き成り曲がり隣の樹に  
当たる冬流。

「いたあ・・・」

冬流は、頭に大きなタンコブを付けた。

「ああ！冬流ちゃん！！慣性の法則を無視してまでツツ！！」

イトウくんは、急いで冬流の手当てをする。

「ニュートンを越えた奴……」

トットリも啞然として冬流を見る。

「とどめのお天気いくどオ！！」

トットリは、下駄を飛ばす。

シュッ！

「！」

チャップピーが下駄が地面に着く前にキャッチした。

「えらいぞチャップピー。」

パプワくんは、チャップピーを誉めると下駄を持つ。

「なるほどいろんな天気を書いてあるナ。」

「返せやアーーーーッ！！」

トットリは、駆けつけて来る。

「日照り。」

ピカ！

トットリは、高温で焼けている。

「大雪。」

ヒューウウウ・・・

今度は、凍り付く。

「南国少年パプワくん作者の故郷長崎名物洪水波浪注意報！」

「ああ！お盆の後は、クラゲが多いッッ！！」

トットリは、洪水に流されながらクラゲの大群に捕まる。

「じゃこーするとかどーなるかな？」

パプワくんは、下駄を角度ある所を地面に刺す。

「あゝ あッ！！そいはアーツ！！！！」

脳天気雲の様子がおかしくなる。

「いけんッ！脳天気雲が混乱し始めちよーッッ！！」

ピカ！バゴオオッ！

脳天気雲は、爆発して消えた。

「この だらすがア!!」

だらすとは、鳥取県でアホか馬鹿と言う意味。

トットリは、クナイを取り出す。

「くだばれ!!このクソガキツ!!」

トットリは、パプワくんの所まで走り出す。

「己えじゃツ!!!!」

ズゴ!

冬流は、冬櫻を鞘に閉まったままトットリの頭を後ろからフルスイングで殴る。

ズン・・・

トットリは、気絶した。

「すまんナ。」

パプワくんが冬流に言う。

「別にアンタ達を助けた訳じゃ無いわよ。」

冬流は、格好付けた。

「チャッピー餌!」

「わう！」

カプツ！

チャッピーは、冬流の頭を力一杯噛む。

「いや・・・君を助けたかったんだヨうん！パプワちゃん。」

「人間素直が一番！」

（可愛くない奴ね！）

冬流は、頭から血を吹きながら思う。

「ありがとう。」

「お礼なら石を早く返してヨ。」

「だーめ。」

パプワくん達は、家に帰って行った。

忍者トットリ参上！（後書き）

次回は、冬流が髪を切る？話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6906i/>

---

南国少年パプワくん アスラクライン

2011年2月7日01時41分発行